

「本当にしつこい子ね。分かったわ。返すわよ。先に私の指輪を返して」と姫は言った。『のら』は息を切らせながら、開いた窓ガラスの隙間から、車の中の姫に手渡した。すると姫は「ほら返すわ」と言っつて、『のら』に向かって指輪を投げた。その時遮断機が上がり、再び車が動き出した。「疲れる子ね」と溜息を付きながら、「早く行っつて」と運転手に強い口調で命令した。

『のら』は投げられた指輪を追いかけた。指輪は石に当たり大きく跳ねた。そして道路脇で止まった。指輪に近づき、『のら』は横を見た。そこは崖となっつていて、「ゴーゴー」という激しい水の音が聞こえてきた。『のら』が恐る恐る指輪を摘み上げた時、一台の車が近づいてきた。それは姫の車であった。車が『のら』の横に止まり、姫は窓越しに「お茶ご馳走様。またお会いしましょう。どこで買ったか分かりやすく次は説明してね」と言っつた。「さ、行っつて」と運転手に告げると、車が勢いよく発進した。車の音にかき消されたが、小さく「ミャー」と言っつ泣き声と、崩れる岩の音が谷にこだましたようであった。

その晩遅く、『マナ』は家に帰っつて来た。『マナ』はその時、家の明かりが消えていることに気が付いた。『のら』の奴、もう寝てるのか」と言いながら家に入った。「のら、帰っつたぞ」と言っつて明かりを付けようとしたところ、何かいることに気が付いた。びくっつとした『マナ』は後ずさりすると、「お帰りなさい」と言っつ二つの影があった。じっつと見ると、それは『タンゴ』と『カンナ』であった。『のら』は「と『マナ』が尋ねると、「お客様と出かけられ、お戻りなっつていません」と言っつた。

